

江戸川乱歩全集 1

屋根裏の散歩者

江戸川乱歩全集1
屋根裏の散歩者

昭和四十四年四月一日 第一刷発行

著 者 江戸川乱歩

装幀者 伊藤憲治

挿 絵 横尾忠則

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二十二・二十一 郵便番号一二二

電話 東京 (942) 一一一一 (大代表) 振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社大光堂

六九〇円

目次

二錢銅貨 9

一枚の切符 29

恐ろしき錯誤 43

二癡人 67

双生児 81

D坂の殺人事件 95

心理試験 117

黒手組 141

赤い部屋

161

算盤が恋を語る話

179

日記帳

189

幽霊

197

盗難

211

白昼夢

225

指環

231

夢遊病者の死

237

屋根裏の散歩者

249

百面相役者

277

一人二役

289

火縄銃

297

闇に蠢く

309

江戸川乱歩に捧げる 有馬頼義

394

作品解題 中島河太郎

399

屋根裏の散歩者

二 錢銅貨

上

「あの泥棒が羨ましい」二人のあいだにこんな言葉がかわされるほど、そのころは窮乏していた。場末の貧弱な下駄屋の二階の、ただひと間しかない大畳に、一閑張りの破れ机を二つならべて、松村武とこの私とが、変な空想ばかりたくましくして、ゴロゴロしていたころのお話である。もうなにもかも行き詰まってしまって、動きの取れなかった二人は、ちょうどそのころ世間を騒がせていた、大泥棒の巧みなやり口を羨むような、さもしい心持になっていた。

その泥棒事件というのが、このお話の本筋に大関係を持つているので、ここにざっとそれをお話しておくことにする。

芝区のさる大きな電機工場の職工給料日の出来事であった。十数名の賃金計算係りが、五千人近い職工のタイム・カードから、それぞれ一ヵ月の賃銀を計算して、山と積まれた給料袋の中へ、当日銀行から引き出された、太トランクに一杯もあろうという、二十円、十円、五円などの紙幣を汗だくになって詰め込んであるさなかに、事務所の玄關

へ一人の紳士が訪れた。

受付の女が来意をたずねると、私は朝日新聞社の記者であるが、支配人にちょっとお目にかかりたいという。そこで女が東京朝日新聞社社会部記者と肩書のある名刺を持って、支配人にこのことを通じた。幸いなことには、この支配人は新聞記者操縦法がうまいことを、ひとつの自慢にしている男であった。のみならず、新聞記者を相手に、ほらを吹いたり、自分の話何々氏談などとして、新聞に載せられたりすることは、おとなげないとは思いつながら、誰しも悪い気持はしないものである。社会部記者と称する男は、快く支配人の部屋へ請じられた。

大きな鼈甲縁の目がねをかけ、美しい口髭をはやし、気のきいた黒のモーニングに、流行の折袴といういでたちのその男は、いかにも物慣れた調子で、支配人の前の椅子に腰をおろした。そしてシガレット・ケースから、高価なエジプトの紙巻煙草を取り出して、卓上の灰皿に添えられたマッチを手際よく擦ると、青味がかった煙を、支配人の鼻先へフッと吹き出した。

「貴下の職工待遇問題についての御意見を」とか、なんとか、新聞記者特有の、相手を呑んでかかったような、それでいて、どこか無邪気な、人懐っこいところのある調子で、その男はこう切り出した。そこで支配人は、労働問題について、多分は労資協調、温情主義というようなことを、大いに論じたわけであるが、それはこの話に関係がないから略するとして、約三十分ばかり支配人の室におった

ところの、その新聞記者が、支配人が一席弁じ終つて、「ちょっと失敬」といって便所に立つたあいだに、姿を消してしまつたのである。

支配人は、不作法なやつだからいで、別に気にもとめないで、ちよつど昼食の時間だったので、食堂へと出掛けて行つたが、しばらくすると、近所の洋食屋から取つたビフテキかなんかを頬ばつていたところの支配人の前へ、会計主任の男が、顔色を変えて飛んできて、報告することに、

「賃銀支払いの金がなくなりました。とられました」

というのだ。驚いた支配人が、食事などはそのままにして、金のなくなつたという現場へきて調べてみると、この突然の盗難の仔細は、だいたい次のように想像することができたのである。

ちよつどその当時、工場の事務室が改築中であつたので、いつもならば、嚴重に戸締まりのできる特別の部屋で行なわれるはずの賃銀計算の仕事が、その日は、假りに支配人室の隣の応接間で行なわれたのであるが、昼食の休憩時間に、どうした物の間違ひか、その応接間が空になつてしまつたのである。事務員たちは、お互に誰が残つてくれるだろうというような考えで、一人残らず食堂へ行つてしまつて、あとにはシナ靴に充満した札束が、ドアには鍵もかからない部屋に、約半時間ほど、ほうり出されてあつたのだ。そのすきに、何者かが忍び入つて、大金を持ち去つたものにちがひない。それも、すでに給料袋に入れられ

た分や、細かい紙幣には手もつけないで、シナ靴の中の二十円札と十円札の束だけを持ち去つたのである。損害高は約五万円であつた。

いろいろ調べてみたが、結局、どうもさっきの新聞記者が怪しいということになつた。新聞社へ電話をかけてみると、やっぱり、そういう男は本社員の中にはないという返事だつた。そこで、警察へ電話をかけるやら、賃銀の支払を延ばすわけにはいかぬので、銀行へ改めて二十円札と十円札の準備を頼むやら、大へんな騒ぎになつたのである。

かの新聞記者と自称して、お人よしの支配人に無駄な議論をさせた男は、実は、当時、新聞が紳士盗賊という尊称をもつて書き立てていたところの、有名な大泥棒であつたのだ。

さて、所轄警察署の司法主任その他が臨検して調べてみると、手掛りというものがひとつもない。新聞社の名刺まで用意してくるほどの賊だから、なかなか一筋縄で行くやつではない。遺留品などあろうはずもない。ただひとつわかつていたことは、支配人の記憶に残っているその男の容貌風采であるが、それが甚だたよりないのである。というのは、服装などはむろん取りかえることができるし、支配人がこれこそ手掛りだと申し出たところの、鼈甲縁の目がねにしろ、口髭にしろ、考えてみれば、変装には最もよく使われる手段なのだから、これも当てにはならぬ。そこで、仕方がないので、めくら探しに、近所の車夫だとか、煙草屋のおかみさんだとか、露店商人などという連中に、か

くかくの風采の男を見かけなかったか、若し見かけたらどの方角へ行ったかと尋ねまわる。むろん市内の各巡查派出所へも、この人相書きが廻る。つまり非常線が張られたわけであるが、なんの手ごたえもない。一日、二日、三日、あらゆる手段が尽された。各駅には見張りがつけられた。各府県の警察署へは依頼の電報が発せられた。こうして、一週間が過ぎさったけれども賊は挙がらない。もう絶望かと思われた。かの泥棒が、何か別の罪をでも犯して挙げられるのを待つよりほかはないかと思われた。工場の事務所からは、その筋の怠慢を責めるように、毎日毎日警察署へ電話がかかった。署長は自分の罪でもあるように頭を悩ました。

そうした絶望状態の中に、一人の同じ署に属する刑事が、市内の煙草屋の店を一軒ずつ丹念に歩きまわっていた。

市内には、舶来の煙草をひと通り備え付けているという煙草屋が、各区に、多いのは数十軒、少ない所でも十軒内外はあった。刑事はほとんどそれを廻りつくして、今は、山の手の牛込と四谷の区内が残っているばかりであった。きょうはこの両区を廻ってみて、それで目的を果たさなかつたら、もういよいよ絶望だと思った刑事は、富籤の当り番号を読むときのような、楽しみとも恐れともつかぬ感情をもって、テクテク歩いていた。時々交番の前で立ち止まっては、巡査に煙草屋の所在を聞きだしながら、テクテクと歩いていた。刑事の頭の中は FIGARO, FIGARO, FIGARO と

ARO と、エジプト煙草の名前で一杯になっていた。ところが、牛込の神楽坂に一軒ある煙草屋を尋ねるつもりで、飯田橋の電車停留所から神楽坂下へ向かって、あの大通りを歩いていたときであった。刑事は、一軒の旅館の前で、フト立ち止まったのである。というのは、その旅館の前の、下水の蓋を兼ねた御影石の敷石の上に、よほど注意深い人でなければ目にとまらないような、ひとつの煙草の吸殻が落ちていた。そして、なんとそれが、刑事の探しまわっていたところのエジプト煙草と同じものだったのである。

さて、このひとつの煙草の吸殻から足がついて、さしもの紳士盗賊もついに獄裡の人となったのであるが、その煙草の吸殻から盗賊逮捕までの径路に、ちょっと探偵小説じみた興味があるので、当時のある新聞には、続き物になって、そのときの何某刑事の手柄話が載せられたほどであるが——この私の記述も、実はその新聞記事に拠ったものである——私はここには、先を急ぐために、ごく簡単に結論だけしかお話ししている暇がないことを残念に思う。

読者も想像されたであろうように、この感心な刑事は、盗賊が工場の支配人の部屋に残して行ったところの、珍らしい煙草の吸殻から探偵の歩を進めたのである。そして、各区の大きな煙草屋をほとんど廻りつくしたが、たとえ同じ煙草を備えてあっても、エジプトの中でも比較的売行きのよくない、その FIGARO を最近に売ったという店はごく僅かで、それが「こゝろとく」、この誰それと、疑うまで

もないような買い手に売られていたのである。ところがいよいよ最終という日になって、今もお話したように、偶然にも、飯田橋附近の一軒の旅館の前で、同じ吸殻を発見して、実は、あてずっぽうに、その旅館に探りを入れてみたのであるが、それがなんと僥倖にも、犯人逮捕の端緒となったのである。

そこで、いろいろ苦心の末、たとえば、その旅館に投宿していたその煙草の持ち主が、工場の支配人から聞いた人相とはまるで違っていたりして、だいぶ苦勞をしたのであるが、結局、その男の部屋の火鉢の底から、犯行に用いたモーニングその他の服装だとか、鼈甲縁の目がねだとか、つけ髭だとかを発見して、逃がれぬ証拠によって、いわゆる紳士泥棒を逮捕することができたのである。

で、その泥棒が取り調べを受けて白状したところによると、犯行の当日——もちろん、その日は職工の給料日と知って訪問したのだが——支配人の留守のまに、隣の計算室にはいつて例の金を取ると、折靴の中にただそれだけを入れておいたところの、レインコートとハンチングを取り出して、その代りに、靴の中へは、盗んだ紙幣の一部分を入れて、目がねをはずし、口髭をとり、レインコートでモーニング姿を包み、中折れの代りにハンチングをかぶって、きたときは別の出口から、何くわぬ顔をして逃げ出したのであった。あの五万円という紙幣を、どうして、誰にも疑われぬように、持ち出すことができたかという訊問に対して、紳士泥棒がニヤリと得意らしい笑いを浮かべて答え

たことには、

「わたしどもは、からだじゅうが袋でできています。その証拠には、押収されたモーニングを調べてごらん下さい。ちよつと見ると普通のモーニングだが、実は手品使いの服のように、付けられるだけの隠し袋が付いているんです。

五万円くらいの金を隠すのはわけはありません。シナ人の手品使いは、大きな、水のはいったどんぶり鉢でさえ、からだの中へ隠すではありませんか」

さて、この泥棒事件がこれだけでおしまいなら、別段の興味もないのであるが、ここにひとつ、普通の泥棒とちがった妙な点があった。そして、それが私のお話の本筋に、大いに関係があるわけなのである。というのは、この紳士泥棒は、盗んだ五万円の隠し場所について、一ことも白状しなかったのである。警察と、検事廷と、公判廷と、この三つの関所で、手を換え品を換えて責め問われても、彼はただ知らないの一点張りで通した。そしておしまいは、その僅か一週間ばかりのあいだに、使い果たしてしまつたのだというような、でたらめをさえ言い出したのである。その筋としては、探偵の力によって、その金のありかを探し出すほかはなかった。そして、ずいぶん探したらしいのであるが、いっこう見つからなかった。そこで、その紳士泥棒は、五万円隠匿のかどによって、窃盗犯としては可なり重い懲役に処せられたのである。

困つたのは被害者の工場である。工場としては、犯人よりは五万円を発見してほしかったのである。もちろん、警

察の方でも、その金の搜索をやめたわけではないが、どうも手ぬるいような気がする。そこで、工場の当の責任者たる支配人は、その金を発見したものには、発見額の一割の賞を懸けるということを發表した。つまり五千円の懸賞である。

これからお話ししようとする、松村武と私自身とに関するちょっと興味のある物語は、この泥棒事件がこういうふうに發展しているときに起こったことなのである。

中

この話の冒頭にもちょっと述べたように、そのころ、松村武と私とは、場末の下駄屋の二階の六畳に、もうどうにもこうにも動きがとれなくなって、窮乏のドン底に沈んでいたのである。でも、あらゆるみじめさの中にも、まだしも幸運であったのは、ちょうど時候が春であったことだ。これは貧乏人だけにしかわからない、ひとつの秘密である。冬の終りから夏のはじめにかけて、貧乏人はだいぶ儲けるのである。いや、儲けたと感じるのである。というのは、寒いときだけ必要であった、羽織だとか、下着だとか、ひどいものになると、夜具、火鉢の類に至るまで、質屋の蔵へ運ぶことができるからである。私どもも、そうした氣候の恩恵に浴して、あすはどうなることか、月末の間代の支払いはどこから捻出するか、というような先の心配をのぞいては、先ずちょっと息をついたのである。そして、

しばらくは遠慮しておった銭湯へも行けば、床屋へも行く、飯屋ではいつもの味噌汁と香の物の代りに、さしみで一合かなんかを奮発するといったあんばいであった。

ある日のこと、いい心持になって、銭湯から帰ってきた私が、傷だらけの毀れかかった一閑張りの机の前に、ドツカと坐ったときに、一人残っていた松村武が、妙な、一種の興奮したような顔つきをもって、私にこんなことを聞いたのである。

「君、この、僕の机の上に二銭銅貨をのせておいたのは君だろう。あれは、どこから持ってきたのだ」

「ああ、おれだよ。さっき煙草を買ったおつりさ」

「どこの煙草屋だ」

「飯屋の隣の、あの婆さんのいる不景氣なうちさ」

「フーム、そうか」

と、どういうわけか、松村はひどく考えこんだのである。そして、なおも執拗にその二銭銅貨について訊ねるのであった。

「君、そのとき、君が煙草を買ったときだ、誰かほかにお客はいなかったかい」

「確か、いなかったようだ。そうだ。いるはずがない、そのときあの婆さんは居眠りをしていたんだ」

この答えを聞いて、松村はなにか安心した様子であった。

「だが、あの煙草屋には、あの婆さんのほかに、どんな連中がいるんだろう。君は知らないかい」

「おれは、あの婆さんとは仲よしなんだ。あの不景氣な仏頂面が、妙に氣に入っているのね。だから、おれは相当あの煙草屋については詳しいんだ。あそこには婆さんのほかに、婆さんよりはもっと不景氣な爺さんがいるきりだ。しかし、君はそんなことを聞いてどうしようというのだ」

「まあいい。ちょっとわけがあるんだ。ところで君が詳しいというのなら、もう少しあの煙草屋のことを話さないか」

「ウン、話してもいい。爺さんと婆さんとのあいだに一人の娘がある。おれは一度か二度その娘を見かけたが、そう悪くないきりようだぜ。それがなんでも、監獄の差入屋とかへ嫁入っているという話だ。その差入屋が相当に暮らしているの、その仕送りで、あの不景氣な煙草屋も、つぶれないで、どうかこうかやっているのだと、いつか婆さんが話していたけ……」

私が煙草屋に関する知識について話しはじめたときに、驚いたことには、それを話してくれと頼んでおきながら、もう聞きたくないといわぬばかりに、松村武が立ち上がったのである。そして、広くもない座敷を、隅から隅へ、ちよど動物園の熊のように、ノソリノソリと歩きはじめたのである。私どもは、二人とも、日頃からずいぶん氣まぐれなほうであった。話のあいだに突然立ち上がるなどは、そう珍らしいことでもなかった。けれども、この場合の松村の態度は、私をして沈黙せしめたほども、変っていたのである。松村はそうして、部屋の中をあっちへ行っ

り、こっちへ行ったり、約三十分くらい歩きまわっていた。私はだまって、一種の興味を持って、それを眺めていた。その光景は、若し傍觀者があって、これを見たら、おそらく氣ちがいじみたものであったにちがいないのである。

そうこうするうちに、私は腹がへってきたのである。ちよど夕食時分ではあったし、湯にはいった私は余計に腹がへったような氣がしたのである。そこで、まだ氣ちがいじみた歩行を続けている松村に、飯屋に行かぬかと勧めてみたところが、「すまないが、君一人で行ってくれ」という返事だ。仕方なく、私はその通りにした。

さて、満腹した私が、飯屋から帰ってくると、なんと珍らしいことには、松村が按摩を呼んで、もませていたではないか。以前は私どものお馴染であった若い盲啞学校の生徒が、松村の肩につかまって、しきりと何か、持ち前のおしゃべりをやっているのであった。

「君、贅沢だと思っちゃいけない。これにはわけがあるんだ。まあ、しばらく黙って見ていてくれ、そのうちにわかるから」

松村は、私の機先を制して、非難を予防するようにいった。きのう、質屋の番頭を説きつけて、むしろ強奪して、やつと手に入れた二十円ながしの共有財産の寿命が、按摩賃六十銭だけ縮められることは、この際、贅沢にちがいなかったからである。

私は、これらの、ただならぬ松村の態度について、或る